

杜乃柞

秩父神社社報
柞乃杜（ははそのもり）

第 7 号

平成 4 年 12 月 3 日
(大 祭)



秩父神社社報
柞乃杜（ははそのもり）
第 7 号
平成 4 年 12 月 3 日
(大 祭)

鎮魂の秋（みたましずめのとき）

透明な空に菊の花が匂って、いま秩父の山里に晩秋の冷氣が満ちています
激しい夏の暑さをもう忘れたように、山肌の紅葉が鮮やかに色付きました

ご神木の大銀杏が、黄菊の大輪のように陽に映える今日このごろ
この山里の冬祭りは、もう間近かです

冬祭りとは、みたまのふゆ、つまりご神徳の増殖を祈るまつり
やがて来る、みたまのはる、つまり春の再来を神に祈るまつりなのです

武甲の山に鎮まる神に、みたまのふゆを祈るために、総出して集うまつり
さればこそ、いまは冬の荒れ果てる山に、せめてもの鎮魂の祈りなのです

この鎮魂の祭りなくして
どうして、山里の恵みを誇ることができましようか

「少し貧しく」

少し寒く

少しひもじく」

ほんのひとむかし、戦争に負けたころは
わたしたちの冬は、きびしい寒さだった

家は焼かれ、着るものもなく、おまけに
食べものは、代用食ばかり

冬枯れのすきま風に、蠟燭の灯を守りながら
家族が貧しい夕餉を分け合って、飢えをしのいだ

これではいけないと、戦後のおとなたちは
歯をくいしばって、働きに働きぬいた

いまは、そのことを一切忘れて、贅沢三昧
寡黙な老人を邪魔にして、我がものの顔の時代

時には先人の苦勞を想い、他国の貧困を傷んで
「少し貧しく、少し寒く、少しひもじく」
みなで貧者の一灯を捧げようではないか

大本の教え

補宜淺見武史

当社には徳川家康公の発願による社殿造営に関する天正二十年（一五九二）の棟札が現存する。棟札とは、上棟式の時、建物名、願主、工匠名、上棟年月日などを書いて棟木に打ちつけ、建物の安泰を祈った板のことで、新築に限らず、大修理、屋根替の時にも造られる。古くは建物の棟木の下面に直接書いた棟木銘が多いが、鎌倉時代の中頃以降は棟札の形式が増え、南北朝以降は殆ど棟札のものとなった。棟札の最も古いものは、中尊寺藏の保安三年（一一二二）銘のものと言われている。棟木銘の場合は棟木の下面に書くので、

行數も限られ、記載も簡単であったが、棟札の場合、初期のものは記載も簡単なものが多いが、次第に詳しく書かれるようになって、板の表裏を使い、長文の経過を誌するようになった。所蔵の棟札の全容を掲載し、当時の造営の概要を述べると、その要旨は延慶年間（1194）に丹党中村氏管掌のもとに造営された社殿が、信玄焼きといわれる武田氏侵入によって元亀元年（1570）焼失し、天正元年（1573）北條氏邦によって再建の工事を始めたが竣工するに至らず、家康公の関東入国をもつて天正二十年に竣工されるに至った次第を記している。当時の貴重な資料として社殿とともに昭和三十年十一月に埼玉県有形文化財に指定された。

当時の社殿は現在の本殿、幣殿、拝殿連繋三棟合殿の華麗な彫刻類で飾る権現造ではなくもつと簡素なもののようであった。「造営之作事・番匠職五百十五人、檜皮葺職二百二十一人、鍛冶職五十人」とあり、その工事期間は七・八・九の三ヶ月で竣工し遷宮の祝を九月二十三日に斎行している。

坂本才一郎氏の教示によれば、この時の社殿様式は、本殿、拝殿別棟の型で本殿の屋根は檜皮葺、拝殿の屋根は柿葺で三間四面の簡素な造りであり、現在の権現造になるまでには数回に及ぶ建替えの歴史があったとの事。

この棟札で特記すべきは天正二十年九月に遷宮祭が斎行されたことである。家康公の関東入国は

裏側 表側

同御遷宮同年九月廿三日庚辰刻	御本事 葉節如來 脇侍天座像一尊者其秘故不願之	九年 成就云云 當初明要六年開基以來天正貳拾年壬辰迄一千四百十年也	元年 雖致龜建修造不成就有大願主都筑右近右衛門尉吉長信心堅固而造營院七八元	近來仁王九十二年花園院朝延慶二年	右當社開基者仁王三十年代 欽明天皇御宇明要六年丙寅奉祝以來而至今天正廿年壬辰一千四百十年也
黑崎 華人	河田五郎左衛門尉	河野 國書助	阿佐美庄左衛門尉	楡皮奉行	材木奉行并
鹿立願主	河田備前守	能太郎新井三郎左衛門尉	主 藤 首	楡皮奉行	材木奉行并
聖衆天中大旦那東國國王正二位源朝臣家康	仁皇百十世天正帝朝造宮免起大旦那筑右衛門尉吉長	合泰 造立武州秩父郡武光名大宮妙見大菩薩護社檀一宇楡皮晝成就畢	一天國務關白大臣 神主 蘭田刑部左衛門尉秀滿	大工甲州住 渡邊小次郎	楡皮晝 山梨郡
良知喜一郎	楡皮晝 甲州住	同横屋勢右衛門尉	并 太郎左衛門尉	市河二郎右衛門尉	臨事奉行
齋藤善七郎	鍛冶新五郎	日	臨事奉行	市河二郎右衛門尉	日
千時天正二十年壬辰九月	同日那當代官成瀬吉右衛門尉	日	臨事奉行	市河二郎右衛門尉	日
迴陵頻伽聲	同日那當代官成瀬吉右衛門尉	日	臨事奉行	市河二郎右衛門尉	日

造營之作事	番匠職	五百十五人
鍛治職	檜皮葺職	二百廿一人
		五十八人

天正十八年八月であり、領国支配を開始してより二年に満たぬうちに造営に着手した。しかも支配下の内、地元武州住のものに従事させたのではなく、甲府代官を勤めた成瀬吉右衛門尉をして、優秀な甲州住の大工、檜皮職、鍛冶職をもつて造営工事の任に当たらせ、再建工事を始めて三ヶ月で竣工なし得たのは、妙見軍神の靈祠の神威によるものと思う次第である。



鎮守の森—家郷の神道的造形

宮司 蘭 田 稔

序 ふるさとの心象

哲学者M・ハイデッガーがいうように、故郷喪失者とは等しく現代の人間像を表わす言葉のひとつである。だが、それでも「鎮守の森」というイメージは、まだ多くの日本人にとって懐かしい故郷の心象風景にはちがいない。子供の頃に、「村の鎮守の 神さまの/今日はめでたい 御祭日」と『村祭』の唱歌を歌い、また「あざやかな みどりよ/あかるい みどりよ/鳥居をつつみ/わら屋をかくし/かおる かおる/若葉が かおる」と、声を張りあげて『若葉』を合唱したのを覚えている者も、まだ少なくはあるまい。

第二次大戦後の宗教批判が厳しかった頃は、神仏を拝する風儀も廃れたかのごとくであったが、それでも鎮守の杜や森を保存する気風だけは失わなかった。

昭和三十年代の後半、急速な経済成長に沸き立つ日本を訪れたスペインの著名な文明史家ディエス・デル・コラルは、その後『アジアの旅—風景と文化』という著書の中で、特に「鎮守の森」と題して次のように記している。

この国の広汎にわたって至るところで繰り返された最も印象的な映像は、他でもない森と杜とが密接に結合されているということである。(中略)あたかも日本の〈神〉が全自然を満たしている聖なる流れの凝結した一滴にほかならぬように、日本の神社は森という神聖にして広大なる住居の最も圧縮された建築的表示ともいべきものである。

(小島威彦訳、未来社、一九六七年)
ここに云う「鎮守の森」、すなわち〈森と杜との聖なる結合〉が、ほかならぬ神社の本質であり、



日本人の家郷意識に触れる神道の姿であることは、まず認めてよからう。

一 神道と神社

神道と総称される日本在来の民族宗教は、かつて自然環境に直接参入して生活を築いた古代人の宗教文化を、連綿と歴史を通じて継承してきたところにその固有な特色をもっている。いいかえれば、神道は、世界的には消滅して久しい古代宗教を今に継承するユニークな宗教であり、本来は古代にふさわしい〈森の宗教〉あるいは〈祭りの宗教〉である。たしかに古典的神道の自覚的体系は、いわゆる氏姓国家から律令国家に至る大和王権の確立時代に成立するが、その全国的基盤となる民間の習俗的神道は、古代から現代に至るまで国土に限らず配置された神社とその祭りにほかならない。

明治維新のころ全国の神社数は、ほぼ当時の自然村の数に見合った十八万余りと推定された。しかし、明治十二年に整備された神社明細帳では十七万六千余社を数え、同三十九年の神社合祀令直前の調査では、約十九万三千社に達していたが、その後、明治末年までに政府が強制した整理統合によって、その数十一万余社に減少した。現在は、宗教法人に列する公認の神社が八万余りを数え、ほぼ全国大小の地域社会の鎮守や氏神として維持されている。だが、法人の認証を受けない民間や企業の小社を加えると、いまだに二、三十万の数に達するとさえ考えられる。

二 神社と森

神社は、古くカムツヤシロ(延喜式)とも、またモリとも訓んでいた。

『万葉集』にも、

ちはやぶる神の杜しなかりせば

春日の野辺に粟蔀かましを(巻三 四〇四)

春日野に粟まけりせば何時しかに

続きてゆかましを社とむとも(同 四〇五)

という、ある女性と佐伯赤麻呂との二首の贈答歌があり、また、

木綿かけて斎くこの神社越えぬべく

思ほゆるかも恋の繁きに(巻七 一三七八)

あるいは長歌の一節に、

山おろしの 風な吹きそと うち越えて

名に負へる社に 風祭せな(巻九 一七五一)

山科の 石田の社の すめ神に 幣帛取り向けて

われは越え行く 相坂山を (巻十三 三三三六)

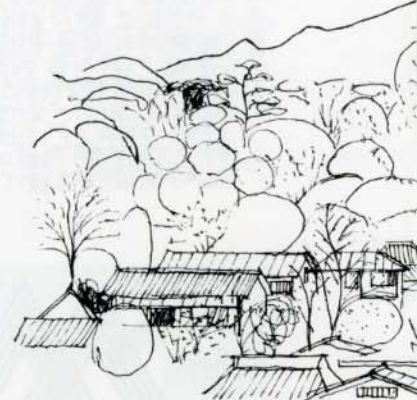
などと詠われている。

ヤシロとは、もと社殿の建物をさすのではなく、

屋代すなわち屋舎の建つべき場所であった。そこで神のヤシロとは、神を祭るべき神聖な空き地で、ふだんは注連縄で標めて囲っておく禁足地だと考えられる。春日野は神のヤシロとして禁足地だったから粟を蒔くことはできないのであった。お宮のミヤは、おそらく御屋であるから、ヤシロに社殿が建てられてからの名称である。他方、「神社」や「社」あるいは「杜」とも書き表わしてモリと訓むのは、これも日本独特の漢字の用法で、実は神の鎮まる森すなわち、こんもりとした社叢をさしている。なぜなら、中国で使う「杜」は大地の神をさし、「社」も野性の梨の木でしかないからである。つまり、日本の「神社」とは、もと神の鎮まる神聖な森にはかならなかった。

三 神社と祭り

しかも神社の古態では、多くの場合モリはすなわちオヤマ(御山)であった。山麓祭祀が神社のおもな起源形態なのである。たとえば奈良盆地の大神神社は、神殿なしに背後の三輪山をそのまま神の社とする古代祭祀を現に伝えているが、近くの石上神宮の布留山も、また春日大社の三笠山もそれぞれ神体山であり、京都の総鎮守、加茂神社も上社、下社ともに神山、御蔭山という神体山から神を迎える祭りの形式を今に伝えている。一般に神体山と呼ぶのは、古典上「神奈備(山)」すなわち神が鎮まる聖山のことで山そのものが神体なのではないが、全国的にそれと見なされる山には神山(コウヤマ、ミヤマ)、宮山、御嶽(ミタケ・オンタケ・ウタキ)、大山(オオヤマ・ダイセン)、森山(モリヤマ・ムリヤマ)などの通称がみられる。森とも山ともつかぬ地方的な聖地には、奄美のオボツヤマ、種子島のカローヤマ、薩摩・



研究室より吉の山・大文堂・望む 13

大隅のモイドン、西石見の荒神森、対島の天道山などの例がある。多くの場合、集落から間近に眺められる印象的な山岳やこんもりと樹林に覆われた姿のよい丘陵で、どの場合も住民の生業と生活に不可欠な灌漑の水源や集落景観の奥まったランドマークを構成している。海や湖の沿岸集落では、豊富な漁場でもある沖合の岩礁や小島を「立ち神」とも「神島」ともするが、逆に航路や漁場の陸標ともなる「山立て」の岬や内陸の山を信仰の対象としていることも多い。

最近の国語学の成果では、日本語のカミは古くクマ(隈)やクム(隠れる)を語源とする水源の山谷に隠れた靈性をさしたという。日本の山岳列島の局地的な自然環境に土着して農林漁業を営む集落の住民たちが、何世代にもわたって築き上げた安心立命の生活世界は、おのづからそうした山や森に隠れた靈性を発見してカミに祭る生命的なコスモスを構成したのであった。

結び 家郷のコスモロジー

古来、日本人が安心立命の故郷と頼む村や町の家郷秩序には、それぞれに氏神鎮守の社を中核とする、いわば山宮―里宮―田宮あるいは沖宮―里宮―浜宮といった祭祀構造が理念的に伏在している。里宮は本来、山宮から神を集落に迎えるべきヤシロの森なのだが、まささきに社殿を構えて神の常在する氏神鎮守の社となった。それでも、ふだんは森の内に鎮まって、集落に与る奥ないし他界という聖なる空間秩序を体现することに変わりはなく。田宮や浜宮は、集落の生業や生活の場に神が臨在する祭礼時の仮り宮、すなわち神宿、頓宮や御旅所と考えてよい。

日本の集落は、伝統的に中心の広場がなく、道路を軸にしてコミュニティを構成する。鎮守の祭りが、山宮から里宮、里宮から神宿へと、神を街路に臨幸せしめて集落全体を聖なる開放空間に変える。この晴れの時こそ、ムラがマチ―イチと化して人心の活気が盛んによみ給える。こうした住民総出の喜びの交歓こそ、鎮守の森のものの静かで透明な秩序がもたらす家郷という安心立命の世界なのである。

表紙説明

やまと一あーと みゅーじあむ

館長 富田 孝氏

(現横瀬町町長)

■棟方志功作

「山懐嶺 秩父夜祭の柵」について

—談—

◆歌の話からお伺いします。

◆秩父夜祭の柵というのは、棟方志功の作品の中でこれ一点のみです。小林正一さんという、現在町田市に住んでいらっしゃる方が歌を作られました。発表された場所は外秩父の都幾川だそうです。それを棟方が作品に取り入れたということのようです。

棟方は秩父に來ていると思います。確かめようと調べているのですが、まだ分かりません。夜祭りを直に見たか、何らかの形で詳細に話を聞いて作品にしたのだと思います。



◆歌があつて作品にしたということなのでしようか。

◆棟方は、よく歌や詩を自分自身の作品の中に読み込んでいます。版画にしてもしかり、大和絵という肉筆画にしても極めて宗教色が濃く、文学的な雰囲気が出てくるものが多いようです。

◆この秩父夜祭の柵はいつ頃の作品ですか。

◆昭和三十九年の作品です。三年ぐらい探してようやく見付けました。作品集にも載っていて、版画ですから何点か作っていると思うのですが、なかなか見付からなくて苦労しました。

◆こちらのミュージアムをお造りになった理由をお聞かせ頂けますでしょうか。

◆一番大きな理由は、秩父がリゾート地域に指定されたことです。何か地元としてふさわしい施設ができないものだろうかかと考えていました。秩父の自然をもう少し都会の人にも理解してもらいたいと考えます。この建設工事についても立木を可能な限り残しました。木はなるべく手を付けないように保存して造っています。また秩父の風土に適した施設ということで、館内にある椅子も、秩父産の樹齢二百年は経っている松の老木で作ったものですし、障子は横瀬の生川の材木を用いています。

私は、暫く棟方の作品にこだわっていきたくて考えています。秩父には彼の作品が合っていると思うのです。入館された方々のご意見も、秩父に合うと言われている。これは棟方の作品がもつ宗教的な雰囲気、秩父の伝統的な歴史風土に極めて馴染み易いということだと思えます。地方文化ですね。

◆氏子青年会活動

平成四年七月～十一月

七月

川瀬祭助勤

九月

境内清掃奉仕

十月

第二回「親月コンサート」

川越まつり視察研修

両陛下中国御訪問中

夜間警戒奉仕

十一月

まつり部会勉強会

「秩父の屋台・笠鉾について」

※その他各種恒例祭、助勤奉仕



YAMATŌ ART MUSEUM

やまと一あーと みゅーじあむ

秩父市大字大宮坂氷6175 (羊山公園内)

☎ (FAX) 0494-22-8822

観覧料:一般700円/大高生500円/中小生300円

(20名以上は団体扱い=100円引き)

開館時間:午前10時～午後4時/休館日:火曜日

参加者の声

■社務所前のかがり火に招き入れられると、そこは日本伝統の世界。煩雑な日常を忘れ、しばし雅の世界に入る。

参集殿までの長き廊下は現実から幽玄への道程なのか。会場の前には、これから始まる演奏会を盛り上げる様にすばらしい秋の草花達のお出迎え。

日本音楽のすばらしさに触れ、心が透明になっていくのを感じる。またたく間に時は流れた。今回も係の方々のご努力と多くのご援助があったことを知る。

来年も又、すばらしい演奏会になりますように。

(会員 井上静枝)



◆氏子青年会々員募集

当社氏子青年会では、引続き会員を募集しております。歴史・祭いずれかの部会に所属して戴き、各種勉強会及びレクリエーションを通じて、会員相互の親睦を深めております。秩父市内に在住、若しくは主なる勤務先を有する五十歳以下の青年男女の方。当社社務所までお越し下さい。

梟だより

◆式年遷宮
「お白石持ち行事」
参加のご案内

日本人の心の故郷として敬い申し上げる、伊勢の神宮におかれましては、来る平成五年十月に「第六十一回式年遷宮」を執り行います。遷宮とは、二十年に一度、神宮の総てのお社をお立て替え申し上げる古式ゆかしい行事であり、日本を代表するお祭りでもあります。

その遷宮の行事の中で、「お白石持ち行事」が行われます。宮川の清流から拾い集められた丸い白石を、御遷宮目前の真夏（平成五年八月）御敷地に納めに行く行事であり、国の無形民俗文化財にも指定されています。

この行事に参加できるのは、旧神領民に限られていましたが、前回の遷宮から全国民も一日神領民として参加できるようにになりました。ただ今、埼玉県神社庁秩父支部並びに秩父郡市氏子総代会では、参加者を募集しております。一日神領民としてこの行事に参加を希望されます方は、当社までお申し込み下さい。

◆お花畑地名考

市内熊木町にお住まいの柿原謙一氏より投稿を戴きましたので、ここに掲載致します。

「十二月三日夜、屋台に供奉される

秩父神社御神幸の高台は、お花畑である。いつ頃からこの呼称があったのか。享和二年の「秩父妙見宮縁起」には高畑とあり、『松本家御用日記』の文化八年にも高畑とある。だが文久四年には花畑とあり、慶應二年になって御花畑が登場した。お花畑の初見である。日本人季節感を代表する歳時記によると、お花畑は美しい高山植物の夏の季題で、冬にはそぐわない。しかし花野は秋の草花の乱れ咲く山麓原野の季題で、陰暦十一月三日には秋の草花は枯れるが、九月十月頃は美しい原野であつたろう。『御代官様三日夜お花畑へは御出張』との記録は、花野から転じたお花畑呼称の地と判断すれば、季節感無視の呼称にはなるまいと思う。

◆番場町諏訪神社「御柱祭り」

去る九月二十六、二十七日に亘り、当社境内に鎮座する諏訪神社の例祭に際し、全国諏訪神社の本社である諏訪大社に倣い「御柱祭り」を斉行した。



諏訪大社に伝わる「御柱祭り」は、申と寅の歳に行われる大掛かりな神事であり、お社ごとに四本の柱をお立て替える、神宮の式年遷宮の形とも類似する古式ゆかしいお祭りである。

当社に鎮座する諏訪神社は、元来、門前通りである番場町に鎮座していたものを、明治時代、当社に合祀したものであり、

今日でも番場町の氏子の方々によってお守りされている。



この「秩父御柱祭り」についても、今回が第二回目であり、二十六・二十七日が土曜日・日曜日と重なった年に行うこととして、前回決められたことを斉行した訳である。

この諏訪神社と当秩父神社にまつわる伝説は様々で、折々の季節ごとのお祭りの中で、龍の形をしてしばしば現れるお諏訪様に接する機会も多い。当社例祭日である十二月三日（秩父夜祭り）前夜に行われる「諏訪渡り神事」も、そのようなつながりを示す神事の一つである。

本年、盛況の内に終わった「第二回秩父御柱祭り」であつたが、そこには祭日に対する今日的な課題、またそこに拘わる地元氏子衆の新しい試みなど、現代の神社を取り巻く今日の話題が種々含まれており、一つの新しい方向を示すものではないかと考えている。

◆宮司「環境開発」で講演

「新しい世界秩序をめざし—地球と人類の共生」の大会テーマのもと、世界連邦平和促進全国宗教者川崎大会が去る十月十二日、神奈川県川崎市真言宗智山派大本山川崎大師で行われた。神社界をはじめ仏教界各宗派、キリスト教および新宗教の諸団体など、全国の宗教指導者たちが参集して世界平和

の祈りを捧げたが、そこで開催されたシンポジウム「環境開発と宗教—自然への畏敬—」で、当社宮司園田稔が発題者として一時間の基調講演を行い、日本古来の神観念が国土の緑豊かな自然風土に無縁でないことを紹介しながら、伝統的な環境開発が実は、水源林の保護育成であると共に山河に鎮まる神々を見出して祭る風土祭祀の構築でもあったことを解説。日本人の生活の原点にある自然への畏敬が生命全体への畏敬を儀礼の形に深い感銘と共感を喚び起こさせた。

◆秩父神社妙見講

自 平成四年 七月
至 平成四年十一月

七月十二日 下郷講
高野明治講元外、四一〇名参拝
九月三日 荒川講
新井文久造講元外、一二三名参拝
九月十五日 川口三栄講
岡本佐平治講元外、四七名参拝
九月二十日 上町講
新井清講元外、二七五名参拝
十月二日 上宮地講
斎藤愛治講元外、一八三名参拝
十月二十一日 東町講
岩田共司講元外、一〇三名参拝
十一月十二日 番場講
前野福次郎講元外、一三八名参拝
十一月十二日 幸手講
大久保利一講元外、五五名参拝

◆ 菊花展について

十一月一日より十五日までの間、当社境内において第三十九回菊花展が開催された。折しも七五三参りの時節柄、大輪の菊の前で記念撮影に余念のない家族連れも多い。

主催の秩父市菊花愛好会は、秩父市長寿倶楽部の園芸部を前身として、昭和二十九年九月十日、会員数七百名、初代会長に園田頼助氏を迎え創立された。当初より菊花競技展示大会を開催するなど、熱心な活動が続けられており、当社境内に飾られる菊は、郡市の菊花愛好会九団体の中から、特に選り優られた作品のみを展示されている。

また同会は皇室に対する崇敬も極めて篤く、昭和五十六年に始められた秩父宮家への菊花の献上は、現在でも郡市の菊花愛好会を挙げて交替で続けられている。宮様方ご来秩の御には、ご高覧を賜るなど数々の名譽ある歴史を築いてきた。その他、環境美化の観点から「一人一鉢運動」や「花一杯運動」等にも早くから協力し、その実績を挙げている。

現会長 根岸藤吉氏は、今後の抱負として「今後は若い会員を育てながら、日本の国花でもある菊にこだわってい



きたいと思ひます。近年、女性会員が増えて参りましたが、誠に喜ばしいことと思ひます。」と語られる。会員数の減少と高齢化が課題となつてゐる同会では、お話しのように若い会員や女性会員の入会も現在募集中である。



秩父市菊花愛好会
会長 根岸藤吉氏

奉祝事業ご奉賛のお願い

■奉賛金について

平成七年度末までの間、秩父市内各地区におきまして、奉賛金のご寄付をお願い申し上げております。何卒事業の趣旨をご理解の上、各地区の奉賛委員会、または当社社頭におきましてご寄進のほど、宜しくお願い致します。

また、銀行振り込み等の方法でご奉賛を希望されます方は、社務所までご連絡下さい。

■銅板ご寄進について

奉祝事業に用います銅板のご寄進を、社殿右側の神札授与所前におきまして受け付けております。銅板と芳名帳にご記名の上、初穂料千円以上のご奉賛をお願い致します。尚、ご芳名いただきました帳面は、当社の社宝といたしまして永代保存させていただきます。

◆ 事業報告

当社御大典奉祝の第一期事業として行われて参りました「御神門全面改修」が、去る十一月

をもちまして完成終了致しました。本年十二月三日の例祭に際しまして、見事に修復されました御神門のもと、例年にも増して荘厳なる、ご奉仕ができるものと考えております。引き続き着工される一連の事業につきまして、何卒ご理解ご協力のほど宜しくお願い致します。



◆ 当社行事のご案内

■恒例祭

○十二月三十一日 大祓式
参加ご希望の方は午後二時までに当社までお越し下さい。(初穂料千円)

○二月三日 節分追儺祭
年男・年女募集中。

詳しくは社務所までお問い合わせ下さい。

○四月四日 田植祭

午後一時より、県指定無形民俗文化財の「お田植え神事」斉行

○六月三十日 大祓式

参加ご希望の方は午後三時までに当社までお越し下さい。(初穂料千円)

編集後記

■不思議なもので、毎年十二月の秩父夜祭の間際、十一月の勤労感謝の日の前後には、きまつて境内の最も遅い銀杏の葉も片付き、秩父地方に紅葉の終わりと、厳しい冬の到来を告げます。そんな中で、阿含宗、立正佼成会、ダスキン秩父の方々を始め、一般有志の多くの皆様方には毎月の様に自発的に境内の清掃奉仕を通じて、環境整備と美化に努めていただいております。ここに紙面を借りてご報告申し上げます。

■今回、柿原謙一氏から貴重なご投稿をいただきました。氏にはお忙しい中、秩父夜祭の「お花畑」の地名について興味深く綴っておられます。どうぞ一読下さい。

また、本号では特集号として、折り込みの二ページを増刷致しました。奉祝事業にご理解をいただき、大勢の方々から続々と心温まるご奉賛を賜り、こうしてご芳名を掲載できますことをたいへん有難く感謝申し上げます。■「柞乃杜」第七号はいかがでしたでしょうか。編集部では、皆様からのご意見ご感想をお待ちしております。

平成四年(一九九二)十二月三日

編集 秩父神社社務所

〒366 埼玉県秩父市番場町一、二
TEL(0486)22-1026
FAX(0486)24-5596
印刷所 株式会社印刷所
〒366 秩父市東町二十七、八